

三野町の牛鋤

民俗班 (徳島民俗学会)

青木 幾男^{*1}

1. はじめに

牛鋤というのは、農耕具のなかの蓄耕具^{ちくこうぐ}のことである。畜耕具には牛鋤^{うまぐわ}、馬鋤^{うまぐわ}の2つがある。牛鋤は一般に犁^{すき}と言うが、阿波では何処でも牛鋤^{うしんが}、または鋤^{くわ}と言う。それは阿波ばかりではない。昔はどこでもそうであったようで、それを農家の立場から見よう。民具を調べるとき、それを使う人の立場から見なければ本当のことはわからない。民具の「呼び名」というものは、相手に早く的確に伝えるためのものであるが、一口に「すき」といっても、鋤は畜耕用犁^{ふみすき}と、人力用の踏鋤^{てびきすき}と、手引鋤^{うしんが}、(阿波では手引鋤は「てんが」又は「手びき」という)などがいずれの農家にも備えつけてあり、「すき」とだけ言ってもどれを指すのか、繁雑で意をすみやかに相手に伝える事ができなかつた。学名^{がくめい}というのは、標準的な用語で一応決められた品を指している。それを使用する農家の立場から見れば、農具のみならず各種の民具には同じ学名であっても構造や材質に地方差があり、それぞれの地方名(方言)があてはめられている。地方名のなかにその民具の特徴があり、歴史が秘められている。筆者は、昨年は佐那河内村の棚田に使う牛鋤を調査した¹⁾。

それに引きつづいて、平成14年度の三野町調査では7月23日三野町の田岡茂氏(75歳)・小笠原財助氏(74歳)の二人に案内してもらって、大川山(1042m)の中腹に建つ東谷小学校の空室に作られた三野町民俗資料館の牛鋤を調査した。2種類の違った形をした鋤に、「つぶろ機^{がき}」と書いた、紙札が

付けられていた。田岡さんは「三野町では通称つぶろがきと言うこの形の鋤が、多く使われている。薩摩芋掘りに便利な鋤だ」と教えてくれた。

「つぶら」とは古語で「丸いさま」「まろらか」という意味であるが²⁾、阿波の北方(吉野川流域地方)では土中から掘出すサツマイモやラッキョウなど丸々として多くつながって出る様子を「つぶろ」と言う。「がき」は鋤床で掻き出すように出ることであろう。三野町では主として芋採用^{いもとり}に使っていると聞いたが、「つぶろ機」の構造の上からもそれらしい特徴があることを読みとることができた。

阿波の牽を研究するうえで、牛鋤と言ひ、「つぶろがき」と言うのも、それなりに大切なことである。

2. 消えて行く民具「畜耕具」

1) 犁の歴史

日本の農機具の中で犁の研究はあまり行われてい

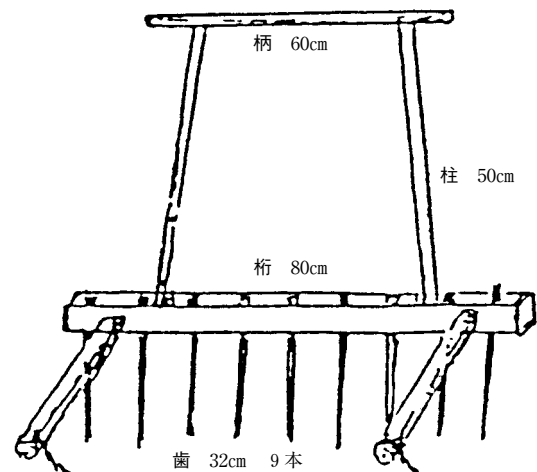


図1 馬鋤 敷地資料館蔵

*1 麻植郡鴨島町敷地964

ない。したがって犁という学名はあっても、その部品名がわからず、その形の地方差を説明するにも困難であった。木下忠の『技術と民俗』³⁾を参考にすれば、犁は中国から伝えられたもので、承平年中(931~38)『和名類聚抄』⁴⁾に載せられており、^{すき}末の字が当てられて近世まで^{からすき}耒耜と読ませていた。

2) 馬鋤の研究

馬鋤は6世紀後半にはすでに日本列島で使用されていたと考えられている²⁾。

三野町でも江戸時代には盛んに馬鋤(図1)は使われていた。また江戸時代に阿波藍の産地に住んでいたと考えられている砂川野水が書いた『農術鑑正記』⁴⁾にも紹介されている。平成7年(1995)ころ神奈川大学の河野道明教授が『農術鑑正記』の調査のため来徳した時、筆者が麻植、板野など藍処の資料館数カ所を案内したことがあった。そのうちの何カ所かの資料館には『農術鑑正記』の挿し絵と同じ「まぐわ」が保管されていて、歯の本数を点検していた河野氏は、歯を抜き挿して容易に歯の間隔を変える事ができることから、マグワ(間鋤)、と言ったのかも知れない、との見解を示された。

牛鋤・馬鋤と言っても、牽引する牛・馬によって呼び名が変わるのではない。

『和漢三才図会』⁵⁾によれば

[マグハ馬齒撃—和名うまくわ]

[三才図会ニ云フ田ノ泥ヲ疏通スル器ナリ 高サ三尺バカリ廣サ4尺 上横ニ柄有 下ニ齒有リ両手ヲ以ツテ之ヲ持シ前ニ畜力ヲ用イテ輓キ行カシム ○按ズルニ其ノ齒大ニ疎ナル故ニ馬ノ齒ト名ズク 凡ソ田ヲ作ルニハ先ヅ犁ニテ之ヲ墾シ重ネテマグワヲ使イ平ニ之ヲ均ラス](図2)

とある。馬鋤も長床犁も、農耕具の主用機具として畜耕具の組合せの中で使用してきたことを示されている。

3. つぶろがきの実測

1) 古式つぶろがき

図2・図3とも、「つぶろがき」の紙札が付いていた。いずれも、つぶろがきの呼び名で使われていたもので、図2を古式つぶろがきとした。坂出市下川津遺跡出土(7世紀)の犁とあまり変わっていない。

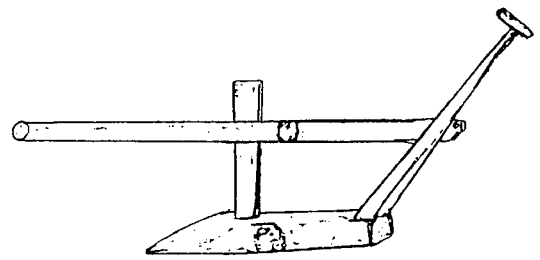


図2 古式つぶろがき 三野町立資料館蔵

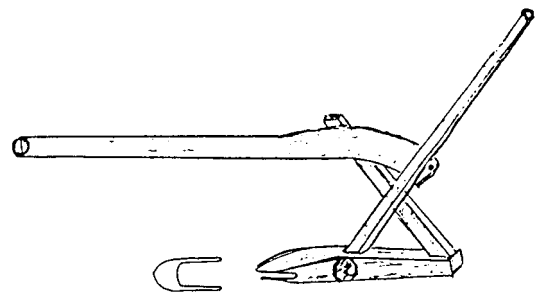


図3 阿波式つぶろがき 三野町立資料館蔵

いと見られる形である。犁床(イサリ)の木部の長さ80cm、犁サキを紛失しているが、木部に^{かんにゅう}嵌入した簣跡がある。床が長く、トリクビも平行して長い。この犁の特徴は床の上面タタリカタの前付近が一番広く高くなっており、前方部表面が鋤先に向かって下るところからややハート型の膨らみをもって下降している。床の側面全体に丸みをもたせており、薩摩芋の皮を傷付けないように工夫されている。

犁柄(イサリノエ)は長さ95.5cm、下方は6cmの角材であるが、上方に行くに従って面を取り最後は5cmの丸棒となって丁字型の横木(長さ17cm・径3.5cm)の執手に接している。徳島の牛鋤で横木の執手というのは初めて見たが、これは鋤の柄が左右いずれかに傾き易い位置を耕す時、要するに傾斜面の山肌を持つ耕地をたがやしている時に犁底が山肌の影響を受けて犁柄が傾くのを正すためであろうと考えられる。犁轆(トリクビ)は長さ153cm、曲りがなく直通にちかく、側面は面とりをして丸みをもたせている。犁箭(タタリカタ)は8.5×2cmの角材で、犁床からトリクビの間の長さは28cmであった。

2) 阿波型つぶろがき

図3を阿波型と言うのは、柄と犁箭が入れ違いになって柄が犁床の前半に取り付けられ、上で交差し、トリクビに接続している。これは県外ではあまり見掛けられないので阿波型とした。この犁は同じ阿

波藍を作る徳島県の「阿波北方」の中にも、やや山間部に近い麻植郡かみごおりや上郡に多く使用されているので、図1と同様に傾斜地などで鋤の安定を計る為に工夫したものでないかと考える。

犁床（イサリ）木部75cm、サキ11cm、計86cmもある古い型の長床犁で、上下共に面取りをして薩摩芋を傷付けないように配慮している。

犁柄（イサリノエ）は長さ111cm、犁床付近では6cm角で、上にいくに従い丸くなり5cmとなっている。

犁轆（トリクビ）は長さ158cm、厚さ5cm、最大幅12cmの根元の曲がった自然木を用い、先端は5cmで丸くなっている。

犁鶴（タタリカタ）は幅8cm、厚さ2cmの角材で犁床からトリクビの間66cm、タタリカタの頭は図1も図2もいずれもトリクビを貫いて10cmばかり上に出ている。これは、犁先とトリクビの角度を換える為の余裕ではないかと考えたが、それが使われた形跡はない。ただし、該当箇所には太い木栓が入っており、いつでも自由に栓を差し換えることが出来る。

4. 農具と作物

三野町の「つぶろがき」については、以上のように一応調査することが出来た。筆者がここで「つぶろがき」を取り上げたのは、「つぶろがき」が薩摩芋採り機であったということを報告するためではない。

「つぶろがき」という名で使用されてきた三野町の長床犁は、香川県下川津遺跡出土の7世紀の長床犁²⁾と同じ条件をそなえている伝統的農具である。1戸の農家は普通1～2機しか犁を持っていない。畑用・棚田用、藍作など専用犁があるわけではないが、農具は総合的に道具の組み合わせの中で最善の方法で農作業が行われている。その組み合わせの違いが地方色であり、生産物の評価として現れてくる。

馬鋤も犁も農作物の育成過程で使用する管理機であり、その中でも畜耕具は前述したように馬鋤も犁もいずれも、古墳時代から近世に至るまで伝統的に続いてきた農作業の代表的耕起具であった。犁、馬鋤を中心とする農具の組み合わせの変遷と農地の実態が分かれば、その時代の作物を知ることのできる可能性はある。徳島で薩摩芋が栽培されるようになるの

は江戸中頃と言われてきた⁶⁾。三野町の「つぶろがき」が薩摩芋を傷付けないように工夫されているのは、呼び名の上からも読みとることができる。その土地で生産する作物のために主たる農具の構造を換えるのは、その作物が最も大切な生産物であることを意味する。

農作業具はすべて組み合わせで使用する。単独で生産するものはほとんどない、生産物の良不良や評価は農器具に起因する場合がきわめて多い。昨年の阿波学会報告のなかで¹⁾、北海道の話として、「明治の始め庚午事変で静内に移住させられた稲田家の家臣団が静内地方で阿波藍の栽培を試みた時、在来の犁に似た物はあったがなかなか商品価値のある藍ができず苦心した。最後に営農指導技師が徳島に派遣されて、藍作の長床犁を馬鋤と言う名で持ち帰り、それを手本として、地域に普及したのが成功し、犁は最近まで使っていた」という富士田金輔氏の研究を報告したが、つづいて2003年2月に富士田氏は「伝統の技法に支えられ今に生きぬく北の藍」の中で「北海道に100年前阿波藍の犁が導入されてからの藍作の隆盛と、現在では徳島と並ぶ品質を誇る全国稀れな藍の生産地として活躍している」⁷⁾と報告している。

藍の品質を高める技術のポイントはどこにあるのか知れないが、肥料か、水か、農具か、藍の根先に栄養分を補給する接点に於いて起きるものにちがいない。それゆえ、人間の箸のような役割をしているのが藍作の犁だと考える。

昨年の阿波学会報告書の中で、「佐那河内米が旨いのは棚田の底を守るために、牛鋤に工夫がある」という、佐那河内村字仁井田の内藤昭文氏の話を紹介したが¹⁾、そのように民具というのは道具だけでなく、道具と自然、人との組み合わせ（調和）によって伝統的形態が成立しているのである。

5. まとめ

1) 民具の構造とそれを使う人

筆者は昭和45年第17回調査のころから阿波学会調査に毎年のように参加してきた。三野町調査が49回にあたるので数えてみると30年を越えたことになる。西暦1970～2000年という時代は農機具も、使う年齢

層も急速に入れ変わってゆく時代であった。面白い程に農具の地域差を知ることができた。しかしその形が「何故そのように変わったのか」という質問に答えてくれる人はあまりいない。民具調査と言うのは普通あまり使わなくなった道具を調べることが多い。年と共に高齢化し、使った人も次第に少なくなっている。尋ねても普通「これが、いちばん使い良から使っている」という答えだけが返ってくる。

三好町の調査⁸⁾では町立民俗資料館で、棹の上人が上って踏む「カラウス」を発見した。人が上るために棹の上面が広がっている。普通は人は台の上において、片足で棹を踏むのに、「なぜ棹の上に人が上がるのか」と尋ねても現物はどこにも残ってなくて、ただ棹だけが三好町から峠を越えた香川県仲南町にあった。「この辺りはどこでもその様なカラウスであった。」という答えを聞いて「峠型カラウス」と命名した(図4)。それだけを報告して全国に類例がないかと、南は鹿児島県から、北は北海道までの民具の知人30人にアンケートを出したが、峠型はどこにもなかった。それから約10年近く阿波学会の調査でカラウスを訪ねたが、「うえに上がって踏むのが楽だ」というだけで現物はどこにもない。ただ井川町、半田町、穴吹町など阿波の上郡といわれる高い山に囲まれた町村にだけ棹があった。そのため峠型カラウスをつかっていたという報告だけを毎年のようにくりかえしていた。

平成12年1月30日神山町の奥地、^{とのみや}殿宮71番地、田浦善子さん(67歳)方に峠型が1基あると聞いて教育委員会の方の案内で現地に行き実測し、実際に田浦さんにカラウスを踏んでもらってみると、側から見ても楽なような気がする。体質的と言うのか、毎

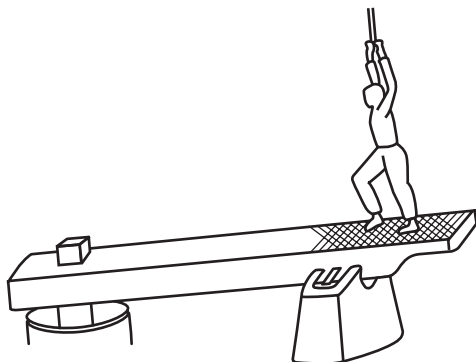


図4 峠型カラウス

日峠道を上り下りする習慣というのか、平地型(片足型)に比べても足取りが軽く、のびやかに感じられる。答えは体質の中にあった。阿波上郡というのは徳島県の面積を三等分した、吉野川の上流に沿う流域を上郡という。下流を^{しもごおり}下郡という。共に阿波藍の生産地であった。下郡は平地部が多いのに対して、上郡は周囲を数多くの700m以上の山にかこまれており、さらに13の千メートルを越える山がある(図表1)。その処がその人たちの生活の場であった。その人たちに「平地道を歩くのと、峠道を歩くのと、どちらが楽か」と尋ねると、ほとんどの人が「峠道が楽だ」という答えがかえって来る。それで、そのような体質をもった人だから使えるのだということを知った。

2) 民具と吉野川の流域

農具は農具の構造だけを見てその形の謎が解けるものではない。その地方の歴史の変遷を考慮しなければならない。筆者は昨年の秋から何回かにわたって美馬町の郷土史家藤野真宥氏宅に伺い「牛鍬」について話を聞いた。数年前藤野氏のお世話で美馬町竹ノ内の農業武田米市氏(平成13年4月没80歳)から筆者の資料館に、三野町の「つぶろがき」よりも古いと思われる牛鍬を戴いたことがあった。それは「つぶろがき」によく似た長床犁でトリクビも長く、イサリの上面の木部も面取りをして床も先も丸みをもたせ、「つぶろがき」と同じ配慮がなされているが、美馬町では「つぶろがき」とは言わない(図5)。藤野氏の話では「明治末年迄は上郡も下郡も阿波藍の生産地であった。藍畑には長床犁を使っていたので徳島には長床犁が多く残っている。農家は牛鍬を大切にした。鍬は鍬床(イサリ)が土に接するので一番早く擦りへる。鍬床に最も良いのは山桑やまく

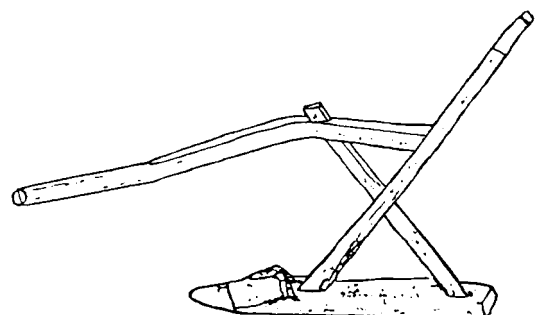


図5 美馬町の牛鍬 敷地資料館蔵

わであった。山桑はケヤキに似ているがケヤキよりも弾力があり、減らず、割れず、耐久性があり最高の良材だと言われていた。上郡も下郡も長床犁を使っていたのは、地質だけの関係ではない。上郡のことを知るためには中世（鎌倉・室町）の歴史を見ればヒントがあるのではないかとのことであった。

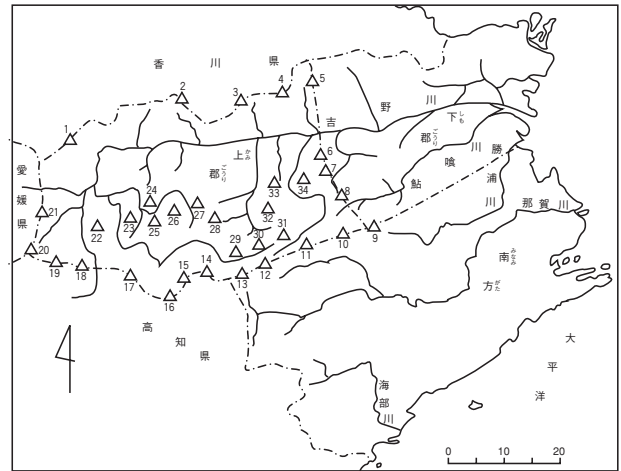
中世の上郡と聞いて驚いた。南北朝時代に南朝を支えて活躍した阿波山岳武士が本拠としたのは、上郡の山々であった。また室町末期、14～15代の将軍、足利氏の任免を自由にした三好長慶等の経済力は何処から出たのだろうか。事あるごとに畿内に数千の兵をだし、済めば上郡に帰って兵を養う。

その様な経済力を蓄積する手立ては何であったかまだわからない。中世の上郡に「カラウスの臼らしいものが残っている」という話は、木屋平村生まれの民具研究仲間から前に何度か聞いたことがある。臼の上部かえり部分に別の石を積んで補うという。集団で屯して生活していたのであろうか。中世に断絶したと考えられていたカラウスが上郡に峠型カラウスとして残っていたことになる。吉野川の流域には解せぬことが多い、上郡と下郡と土質が全く違うのに藍が作れるというのは何故だろうか。

牛鍬だけの問題ではなさそうである。筆者は1992年に『徳島民具研究』⁹⁾のなかで徳島の藍商は藍玉をつくる時に下郡のスクモと上郡のスクモを混合することを説明した。同じ阿波北方であっても主として美馬、三好など、山圍高地産の藍は通称「山葉」と言われ地質の関係からか、色が濃すぎて光沢が乏しく、「地葉」と称する平地産のものに混合すると色・つやともに調整されて、ますます良品となる。山葉は地葉の配合に是非とも必要なものであった。配合の比率を具合という。具合を見るために「搗見臼」という小型の臼と杵が藍師の家には必ずあった。よい「葉藍」を作るためには栽培技術だけでなかった。土が違う、条件にあった土というのがあつたのだろうか。同じことでいえば吉野川の河口、鳴門市で作る薩摩芋「なると金時」は甘いので人気があるが、これも芋の品種だけでなく砂の関係だと言われている。吉野川の流れに沿う平地も山も不思議な力をもっている。

その「不思議」を民具を通して解明するきっかけはないのだろうか。

図表1 阿波上郡の山々



番号	山名	読み	高さ	番号	山名	読み	高さ
1	雲辺谷山	うんべんじやま	920m	18	黒滝山	くろたきやま	1,210m
2	大川	だいせん	1,042m	19	野鹿池山	のかのぢやま	1,294m
3	竜王山	りゅうおうさん	1,059m	20	三傍示山	さんぼうじやま	1,158m
4	大滝山	おうたきやま	946m	21	塩塚峰	しおづかみね	1,043m
5	妙体山	みょうたいざん	785m	22	国見山	くにみやま	1,409m
6	高越山	こうつざん	1,123m	23	中津山	なかつやま	1,446m
7	奥野々山	おくののやま	1,164m	24	腕山	かいなやま	1,332m
8	東宮山	とうぐうざん	1,090m	25	寒風	さむかぜ	1,604m
9	雲早山	くもそうやま	1,495m	26	烏帽子山	えぼしやま	1,669m
10	高越城山	たかしろやま	1,628m	27	石堂山	いしどうやま	1,636m
11	天神丸	てんじんまる	1,632m	28	矢筈山	やはづやま	1,848m
12	剣山	つるぎざん	1,955m	29	黒笠山	くろがさやま	1,709m
13	シロウキウ		1,929m	30	塔丸	とうのまる	1,713m
14	三峰	みうね	1,884m	31	丸笹	まるざさやま	1,711m
15	天狗塚	てんぐづか	1,813m	32	八面山	やづらざん	1,312m
16	網附森	あみつきもり	1,643m	33	友内山	ともうちやま	1,073m
17	京柱峠	きょうちうとうげ	1,150m	34	半平山	はんたいらざん	1,015m

注・文献

- 1) 青木幾男 (2002) : 佐那河内の牛鍬、『阿波学会紀要』第48号 (佐那河内村総合学術調査)、207～210頁。
- 2) 久松潜・佐藤謙三編 (1983) : 新版『古語辞典』角川書店、801頁。
- 3) 木下忠 (1986) : 古代の牛馬耕・他、『技術と民俗』下巻、小学館、22～24頁、95～97頁。
- 4) 砂川野水 (1723) : 『農術鑑正記』享保8年 (『日本農書全集』第10巻、農山魚文化協会、1980年復刻)。
- 5) 寺島良安 (1712) : 『和漢三才図会』(縮刷版・明治39年、吉川弘文館)。
- 6) 寺島良安、正徳2年 (1712) 刊、『和漢三才図会』「甘藷」、巻第102号1430。
- 7) 富士田金輔 (2003) : 北海道の藍作り、『民具マンスリー』、常民文化、35巻11号、1～12頁。
- 8) 青木幾男 (1993) : 『阿波学会紀要』第39号 (三好町総合学術調査)、263～267頁。
- 9) 青木幾男 (1992) : 藍の生産機構と其の民具、『徳島民具研究』、4号、1～10頁。